PRESS RELEASE

木曽川上流河川事務所
安心・潤い・憩い・絆

国土交通省

平 成 ２６年 ２月 １８日
国土交通省中部地方整備局
木 曽 川 上 流 河 川 事 務 所

起小学校４年生が自然環境などについて勉強します！

～木曽川工事見学と環境学習会を開催～

現在、木曽川上流河川事務所では、一宮市及び羽島市においてイタセンパラをはじめとした在来魚類の生息環境の改善を目的とした木曽川の環境整備を実施しております。

そこで、一宮市立　起小学校の4年生を対象に環境整備の目的を理解していただき、イタセンパラなどの木曽川に生息する魚類など、自然環境や人々の暮らしについて知っていただく第一歩として、下記学習会を実施しますのでお知らせします。

なお、当日取材をされる場合は、事前に起小学校までご連絡をお願いします。

1. 開催日時　　平成26年2月21日（金）　午後２時～3 時

2. 開催場所　　木曽川河川敷（一宮市　起地先）
　　※雨天の場合は、小学校でのプログラムに変更

3. 対象　　一宮市立　起小学校４年生

4. 内容　　「川と人とのかかわり」を学ぶための「歴史学習」、魚類の生息環境の改善を目的とした「工事見学」、イタセンパラと木曽川のワンド」について学ぶための「環境学習」等を予定しています。

5. 配布先　　一宮日刊記者会、岐阜県政記者クラブ

6. 問合せ先　　国土交通省　中部地方整備局　木曽川上流河川事務所　木曽川第二出張所
　　TEL：0586-62-5450
　　出張所長　上野

7. 取材の場合の連絡先
　　一宮市立　起小学校(担当：教頭　鷲見)　0586-62-6292

図．工事見学・環境学習会実施箇所

知っているかな？木曽川のイタセンパラ

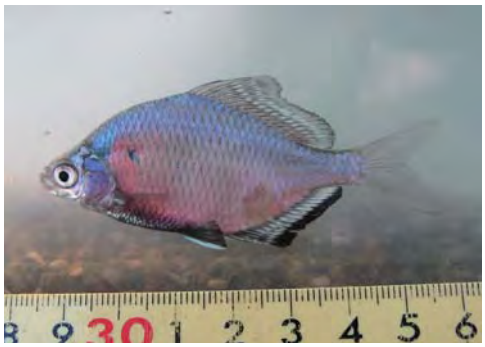
来て・見て・知って
守ってほしい
木曽川の自然

木曽川にすむ貴重な魚「イタセンパラ」

イタセンパラは、タナゴとよばれる魚のなかまです。世界でも日本の限られた地域だけにみられ、国の天然記念物に指定されている、たいへん貴重な生きものです。

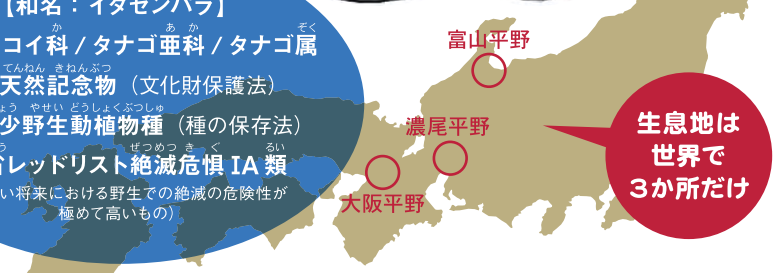
かつては広く生息していたと考えられる濃尾平野のなかでも、今では木曽川のごく一部でしかみつかっておらず、絶滅が心配されています。

ほかのタナゴのなかまと同じように、二枚貝（イシガイやドブガイなど）のなかに産卵するという、変わった特徴をもっています。



繁殖期のオス

【和名：イタセンパラ】
コイ目／コイ科／タナゴ亜科／タナゴ属
国の天然記念物（文化財保護法）
国内希少野生動植物種（種の保存法）
環境省レッドリスト絶滅危惧IA類
（ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）



【かたち】平べったく四角いからだと、大きなヒレが特徴です。繁殖期（秋）になると、雄の体はあざやかな婚姻色になります。
【食べもの】稚魚（子ども）のあいだは動物プランクトンを食べますが、大きくなると、浅い水底に付着した藻類を食べます。

イタセンパラのすむ木曽川中流部の「ワンド」

イタセンパラは、木曽川のなかでも、中流部（愛知県一宮市・岐阜県羽島市の周辺）に特徴的にみられる「ワンド」にすんでいます。ワンドとは、川の本流のまわりの入り江状（または水たまり状）になっているところで、大雨が降って川が氾らん（洪水で川の水があふれること）したときに、水が流れる場所「氾濫原」にできます。

ワンドは、河原が水に浸かったあとにできる水たまりのような環境で、流れがゆるやかなことから、泳ぐ力のよわい魚や、水草、水生昆虫などの大切なすみ場所になっています。

木曽川中流部にたくさんみられるワンド群周辺では、イタセンパラのほかイチモンジタナゴやベニイトトンボ、カキツバタなどの希少な生物が確認されています。

イチモンジタナゴ

ベニイトトンボ

カキツバタ

木曽川中流部に点在するワンド群

イタセンパラは絶滅危惧種 どうして減ってしまったの？

理由① ワンドの環境が悪くなった。

ワンドにヘドロが溜まって二枚貝などがすみづらくなったり、樹木が茂って日当たりが悪くなり、イタセンパラが食べる藻類が育ちにくくなっています。

理由② 外来種※1が侵入してきた。

外来魚“オオクチバス”

外来ほ乳類“ヌートリア”

外来種がイタセンパラや二枚貝を食べたり、産卵に同じ貝を使う外来魚がイタセンパラの産卵場をうばってしまうことがあります。

※1 外来種：本来すんでいるのとは別の場所から、人によってつれてこられた生物

理由③ ワンドの数が減ってしまった。

イタセンパラや二枚貝の生息場であるワンドが、昔に比べて減りました。

理由④ 密漁されてしまう。

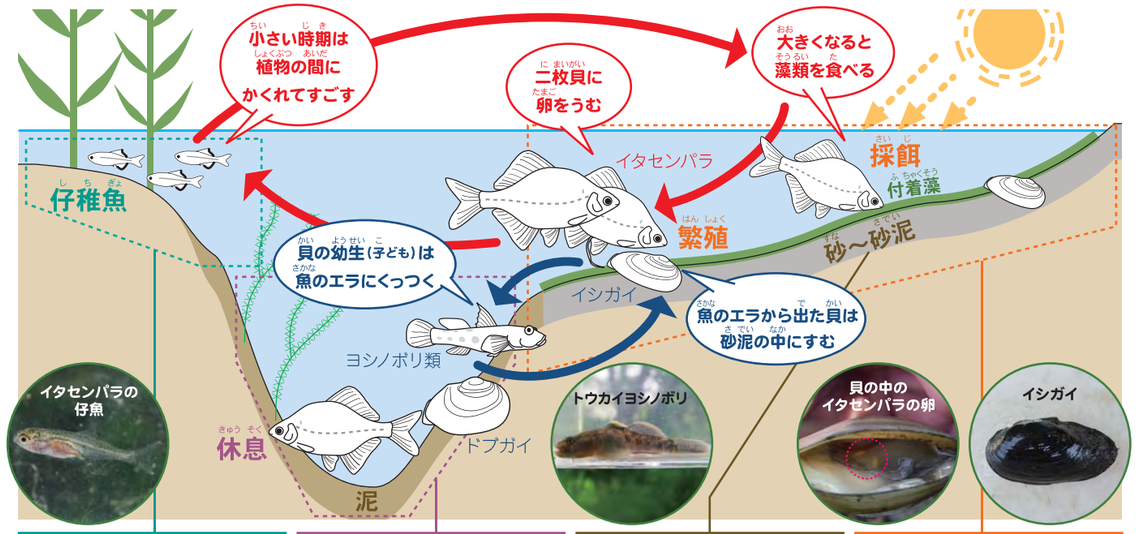
国の天然記念物であるイタセンパラは、法律で捕獲が原則禁止されていますが、心ない人が採ってしまうことがあります。

どんな環境がいいの？ イタセンパラの「生活史」を知ろう

イタセンパラは、二枚貝（イシガイやドブガイなど）のなかに産卵するめずらしい特徴をもっており、秋に産卵し、貝のなかでふ化した仔魚（子ども）は、冬のあいだを貝のなかで過ごします。春になって貝から泳ぎ出してからしばらくは、水際の植物のまわりで過ごし、大きくなると浅い水底に付着した藻類を食べ、秋に産卵した後は死んでしまう、というほぼ1年サイクルで生きています。

また、イタセンパラが産卵する二枚貝は、幼生（子ども）のころ少しの期間、ヨシノボリ類などの魚のエラの中ですごしたあと、地面のなかに移動して大きくなります。

このように、イタセンパラの生活史は、二枚貝やヨシノボリ類などの魚類と深くかかわりあって成りたっています。



【水際の植物】
仔稚魚（小さい時期）は、水際の植物のあいだにかくれてすごします。

【深い場所】
鳥などの捕食者から隠れたり、休息するために、水深の深い場所を利用します。

【砂～砂泥底の場所】
二枚貝はヘドロが溜まっていない、砂や砂泥の場所に生息します。

【浅い場所】
日当たりのよい場所に生える藻類を食べ、浅場にいる二枚貝に産卵します。

イタセンパラの生活に必要なワンドの環境

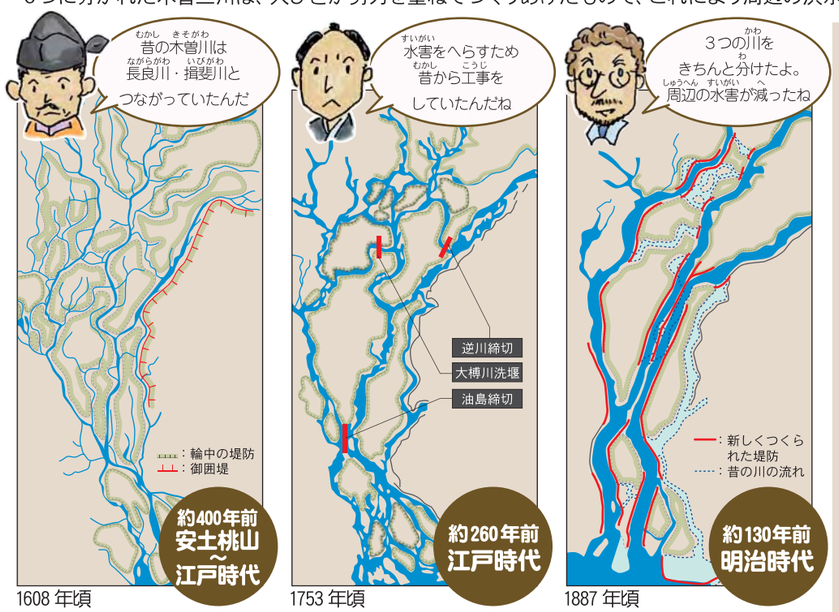
イタセンパラにとって良好なワンド環境は、イタセンパラが利用する場所（上図参照）がそろっているだけでなく、二枚貝やヨシノボリ類などの魚類が生息できることが重要です。

特に産卵する二枚貝が生息できるよう、ワンドは砂や砂泥底でヘドロやゴミが溜まってない状態であることが大切です。また、ヨシノボリ類などの魚類がワンドに入ってこられるよう、定期的に氾らんが起きて、川とワンドがつながることも必要です。

ワンドはほんとに減っているの？ 木曽川の「歴史」を知ろう

今よりずっと昔、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）は、複雑に分かれれたり・合わさったりして流れており、大雨が降るとたびたび氾らんし、周囲の人びとは大きな被害に困っていました。

こうした被害を減らそうと、水の流れを変えたり、堤防で囲うなどの工事が、昔から繰り返し行われてきました。今みるような3つに分かれた木曽三川は、人びとが努力を重ねてつくりあげたもので、これにより周辺の洪水被害は大幅に減りました。



＊図は昔の川の流れや整備の経緯のイメージです。（実際の正確な位置を示すものではありません。）

木曽三川の整備の歴史

木曽川中～下流部は、木曽三川の氾らんにより運ばれた土砂が形成する濃尾平野に位置しています。

木曽三川はかつて網目状に流れる自然河川でしたが、およそ400年前ごろ、ひんぱんに生じていた洪水被害への対策として、木曽川左岸に大規模な堤防（御囲堤）や輪中※2がつくられました。

江戸時代中ごろになると、三川を分けることを目的に、油島の締切りなどの工事（宝暦治水）が行われ、明治時代に入ると、海外の技術を取り入れた改修工事により三川分流が実現し、川の大部分が連続的な堤防に守られるようになりました。

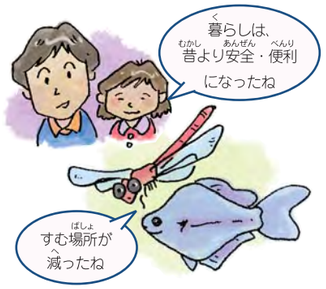
※2 輪中：居住地や耕作地を堤防で囲んだ場所

河川の氾らんの減少にともない減っていく「ワンド」

人の命と財産を守るため、河川の整備はとても重要なものです。しかしながら、河川の氾らんが減ると、周辺の土地が水に浸かる機会も減ります。ワンドは、氾らん時に水が流れる場所（氾濫原）にできるため、氾らんが減れば、ワンドも減ることになります。

また、現存するワンドにおいても、水に浸かる機会が減ると、新しい水が入ってこないため、水質が悪くなったり、ヘドロが溜まるなど、生物がすみづらい環境になります。

かつてはたくさんあった、ワンドの生きものたちの「すみ場所」は、近年、このようにして減っていったと考えられます。



イタセンパラのすむワンドを守るためには、どうしたらいいの？

みんなでできる保全対策を次のページで紹介します

ワンドを守るため、保全対策をすすめています

イタセンパラの絶滅をふせぐためには、イタセンパラや二枚貝のすむワンドを守る必要があります。そのためには、いま残っている良好な環境を維持することが、もっとも大切です。また、環境が悪くなってしまったワンドを、少しでもよくなるよう改善することも効果的です。

木曽川中流部のワンド群では、環境改善を目的として、溜まったヘドロを除去したり、樹木を伐採して日当たりをよくしたり、洪水の際にワンドが水に浸かりやすくなるよう、河原を掘削して高さを切り下げたり（盤下げ）、外来種を駆除するといった対策を行っています。その成果として、現在、二枚貝の増加傾向が確認されています。

ヘドロの除去

樹木の伐採

盤下げ

外来種の駆除

みんなでできる保全対策があります

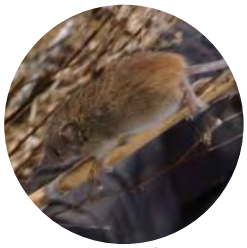
イタセンパラが減ってしまう理由のひとつに、こっそり採ってしまう人（密漁者）がいることがあげられます。木曽川中流部では、近年、密漁をふせぐため、市民のみなさんと行政が合同でパトロールする取り組みが行われています。

毎日、パトロールを続けるのはたいへんですが、日ごろから多くの人がワンドにいれば、密漁者は悪いことがしづらくなるでしょう。みなさんがたびたび、ワンド周辺に散歩や生物観察に来てくれることが、密漁防止につながるのです。

合同パトロール（木曽川イタセンパラ保護協議会）

魅力いっぱいの木曽川に行ってみよう！

イタセンパラだけでなく、木曽川中流部にすむさまざまな生物は、かけがえのない郷土の宝ものです。生物観察ができるのはもちろん、木曽川周辺には歴史・文化を感じるスポットがたくさんありますから、ぜひ、川の自然や歴史に親しんでください。


カヤネズミ

オオヨシキリ

ニホンアカガエル

ツチフキ

写真提供：近藤繁生

キソガワフユユスリカ

【一宮市尾西歴史民俗資料館と旧林家（別館）】木曽川の水運（船で物を運ぶ）と美濃路がまじわる場所にある資料館。ここで、「起宿」の歴史を学ぼう！（一宮市起字下町）

【船橋（船橋跡）】木曽川に橋がなかったころ、川を朝鮮通信使などが通行するときに、270そう以上の船をならべて橋にしました。（一宮市起字堤町）

【起水浴場】プールがなかった60年以上前は、夏になると木曽川で泳いだものでした。今とはちがう、砂浜が広がる風景でした（『尾西市史写真編』より）。（一宮市起字堤町）

【県営西中野渡船場】木曽川に一つしかない渡し船。400年以上前の大洪水で、中野村が分かれてからはじまりました。昔は、大八車や馬も乗る、大事な交通手段でした。（一宮市西中野）

※川へは子どもだけで行かないようにしましょう。水辺で活動するときには、「子供の水辺サポートセンター（http://www.mizube-support-center.org/）」などで公開している注意やマナーを参考に、安全に十分注意してください。雨量や水位などのリアルタイム情報は、「川の防災情報（http://www.river.go.jp/）」で公開されています。

国土交通省 中部地方整備局 木曽川上流河川事務所

木曽川上流河川事務所 河川環境課 〒500-8801 岐阜県岐阜市忠節町5-1（Tel. 058-251-1378）

※協力・資料提供：一宮市尾西歴史民俗資料館